研究要旨

テーマ：自他の健康に根ざすがん教育	
対象学年：高校１年	教科科目：保健

使用した教材

お茶の水女子大学 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構編「Q&A シリーズ 生活習慣病 成人期」 P.6「Q.生活習慣病ってどのような病気ですか？」、P.8「Q.がんってどのような病気ですか？」、P.26「Q.酒・たばこと生活習慣病との関係は？」、P.44「Q.健康診断は生活習慣病の発見に役立つのですか？」、P.58「Q.がんを予防するためにはどんな食事をすればよいのですか？」

問題と目的・授業案のポイント

2022 年度より高等学校では新学習指導要領の施行に伴い、これまで「生活習慣病」の単元の中で学習していたがんが独立した単元となり、より詳細に、より深く取り扱われることとなる。がん教育の施行的・先進的な取り組みとして、①がんへの正しい理解　②がん予防　③がん患者との共生　の 3 つをテーマに、実生活に活かすとともに自他の健康に意識が向くような実践を模索した。

具体的には、授業者の作成した学習プリントや発問により、単なる知識・理解のみではなく、個人や複数人で考える場面を取り入れ、がんに対する関心を高めたり、データからわかることを読み取ったりする工夫を施した。また、Q&A シリーズの副読本を活用し、教科書や図説にない情報や資料を加えたり、補足したりすることで様々な切り口からがんについて考える機会を設けた。さらに、ICT 機器を活用しがんに対する疑問点や課題を明確にしつつ、自身でどんな取り組みができるか思考することでヘルスリテラシーの向上を期待した。

実践結果と考察

アンケート調査では授業を通じて、98%の生徒ががんを「身近な病気」として捉えられた一方で、がんへの「恐怖心」は授業後も多くの生徒が抱いている（授業前 95%→授業後 84%）ことがわかった。加えて、「がんは治らない」と回答した生徒が 2 割以上減った（前 83%→後 61%）ものの、より一層がんに対して正しく恐れる姿勢を定着していく必要がある。

また、授業後も 87%の生徒ががんについて「さらに知りたい」と答えており、「がん検診を受けよう」と大きな意識の変容（前 58%→後 91%）がうかがえた。あわせて自由記述では、がんに対する【意識や考えの変容】と【行動への意識】の両方で、「早期発見（検診の必要性）」が 1 位であったことから、検診を受けるための動機づけが高まっていることが示唆された。さらに、「いのちの大切さを考える」では、授業前後で＋11 ポイント、「がん患者への理解」では＋30 ポイントの上昇がみられた。それにともない、家族や身近な人と「がんについて話し合う」も大幅な上昇（前 35%→後 79%）となったほか、半数以上の生徒が自由記述の【行動への意識】の 2 位「家族や友達とのコミュニケーション」を挙げており、がんに関する問題は自分だけでなく家族や友達と共有すべきものであり、他者の健康に対する意識が本授業によって変容したことがわかった。新学習指導要領では、「自他の健康」という見方を重視しており、がん教育はその可能性を持った題材であることが再確認できた。

以上より、本授業をきっかけにがんについて知り、自他の健康増進に寄与しようとする意識や態度が概ね育まれたといえよう。

大学や他校園との接続や連携に関する示唆

がん教育を充実させるために、小・中学校と連携し、効果的かつスパイラルに学習できるような小中高カリキュラムの検討や大学の遺伝・医療系の先生から専門的な視点でより深くがんについてレクチャーしてもらうことを視野に入れている。

今後の展開の可能性

今後はがん経験者やがん患者の声を実際に聞く機会を設けるなど、より当事者意識をもち身近にがんを考える取り組みの推進やヘルスリテラシーを実生活に落とし込み、自他共に健康な社会づくりに貢献できるような活動へとつなげていきたい。具体的には、総合的な探究の時間などを活用し、がん予防や検診の周知・啓発などを積極的に発信する活動の可能性を検討している。